

朱子学の高麗伝来と対元関係(その二) : 初期段階における禿魯花・ケシク制度との接点

森平, 雅彦
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/19794>

出版情報 : 史淵. 148, pp.39-67, 2011-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



朱子学の高麗伝来と対元関係（その二）

—— 初期段階における禿魯花・ケシク制度との接点 ——

森 平 雅 彦

はじめに

一三世紀末から一四世紀にかけて、高麗王朝治下の朝鮮半島に元朝（モンゴル帝国）治下の中国大陆から朱子学（性理学）が本格的に伝来した。このことは、その学術・思想が高麗末における政治変革の理念となり、新たに建国された朝鮮王朝の体制教学として定着し、結果的に、後世「儒教社会」と形容されるような朝鮮半島社会の諸特徴が形成されてゆく最初のきっかけをつくったという点で、きわめて重要な事件だったといえよう。

この高麗時代の朱子学受容に関するかつての議論は、当時の朱子学徒の先見性や革新性を強調する傾向が強かった。^①しかしこれは、朱子学の本質的な学問水準と、その社会実践面における有用性への樂觀的な高評価を前提とし、また朱子学が諸学のなかで支配的な地位を獲得するにいたったという歴史的結果から遡及した見方であった。これに対して近年の研究では、同時代における当事者の個別具体的な文脈に即して朱子学受容の内実をみきわめ、その多様性を認識しようという方向性が模索されるようになってきた。

この問題を考えるうえで参考にすべきは、フランスのロジェ・シャルチエらが提唱した、いわゆる「文化の歴

史学」の考えかたである。すなわち、ある学術や思想は、その本質的水準に依じて水が高所から低所に流れるがごとく必然的に伝播・拡張するのではなく、書物の出版、教育の制度・習慣、国家の政策、人間関係など、さまざまな外在的条件によってその方向性や様態が規定される。中国大陆における朱子学の普及にも、関連出版物の流布、科挙試験の解答準拠としての指定といった要件がからんでいた。

朝鮮半島における朱子学の受容・普及についても、そうした外在的条件を明らかにしてこそ、その歴史的意義を真の意味で評価し得るであろう。その一端として筆者が現在注目しているのは、新しい学術・思想が中国大陆から朝鮮半島へと空間移動することを可能にした国際環境である。朝鮮半島の人々の側にいかに朱子学受容の内発的必然性があつたとしても、その学術・思想が何らかの媒体を通じて朝鮮半島に伝わり、人々と出会わないうざり、受容の機会自体があたえられないからである。その意味において、この国際環境という条件は、他の諸条件にさきだつ重要性を有するともいえるのではないだろうか。

本稿ではこの問題について、一三世紀末から一四世紀初にいたる最初期の状況を検討してみたい。具体的には、当時における朱子学の先駆者として知られる安珣(一二四三丁一三〇六)、白頤正(一二四七、二二三三)、李齊賢(一二八七、一三六七)、崔文度(一二九二丁一三四五)の四名について、彼らが朱子学を撰取し、あるいは深化させるにいたつた国際的契機を明らかにする。結論を先取りすると、彼らに共通して看取されるのは、当時高麗・元両国の間で政治的慣例として行われていた禿魯花・ケシク制度との関わりである。

禿魯花^{トルガフ} *turqa* とはモンゴルが服属勢力の支配層から徴集した質子のことだが、ごく単純な意味での人質にとどまるものではなかった。あつめられた禿魯花たちは皇帝直属の親衛隊であるケシク *kešik* (宿衛) に編入されるのだが、ケシクにはモンゴル貴族の子弟も参加しており、彼らを中核として組織されていた。ケシクは四番にわかれ、三日交替で皇帝の身边警護にあたると同時に、その家政・政務に関するさまざまな用務(怯薛^{ケシク}執事)を

分担したが、ケシクの隊員は皇帝に親しく仕えるなかでモンゴル帝国支配層の一員として薫陶され、その地位は千戸長の上にたつ榮譽ある特権として位置づけられた。そしてケシクとしての忠勤は皇帝に対する勲功とされ、そこで能力を認められた者が政府のスタッフとして拔擢されてゆく。それゆえケシクは栄達の捷徑とも目されており、外からの服属者を体制内の要員としてすみやかに転換する装置として機能していた。

三〇年近い対モンゴル戦争のすえ、一二六〇年に元に服属し、その後約一世紀間にわたってこれと緊密な政治関係をむすんだ当時の高麗王家もまた、服属初期の元宗以来、歴代ほとんどの国王が、王世子やその代理となる王族を禿魯花として元朝宮廷に送り、ケシクに入侍させていた(図参照)。そして高麗王家や個々の王族は、上述したようなケシク制度の意義・効果を積極的に活用して、元におけるみずからの地位の安定と向上をはかっていたのである。⁽²⁾

一 安珦の場合

安珦は、本貫が興州(順興)、字は士縑、号は晦軒という。在地有力者にして地方行政の末端実務を担った邑吏階層出身の文官であり、一四世紀初には国学の復興に功績をたて、没後は文廟に従祀された。彼の朱子学受容の事績については、すでに別稿で詳しく検討したので、ここではそれにもとづいて要点を概述しよう。⁽³⁾

一八世紀後半から二〇世紀前半までの間にくりかえし編纂・刊行された安珦の伝記『晦軒実記』⁽⁴⁾に収載する彼の年譜には、安珦が庚寅年(一二九〇)に元の燕京(現在の北京)から朱子の書とその真像を高麗にもたらしたことが記されている。この年譜は、一九世紀初に後孫の安在默が重刊本『晦軒実記』(一八二〇年序)を刊行した段階ではじめて増補された項目であり、朱子学書将来の事績もここではじめて登場する。そこには次

のように記されている。

録晦菴朱夫子書、并画其真像以歸家乘考蹟

時朱子書、新行於燕都。先生始得見之、潛心篤好、知其為孔孟正脈、遂手録其書、又写其真像而歸家乘考蹟

これまで右の記事内容については、忠烈王が二二八九年に安珦らをしたがえて入元し、翌年帰国したという『高麗史』世家所載の出来事⁽⁵⁾に対応するものであり、このとき安珦によつてはじめて朝鮮半島に朱子学がもたらされた史実を伝える史料として理解されてきた。

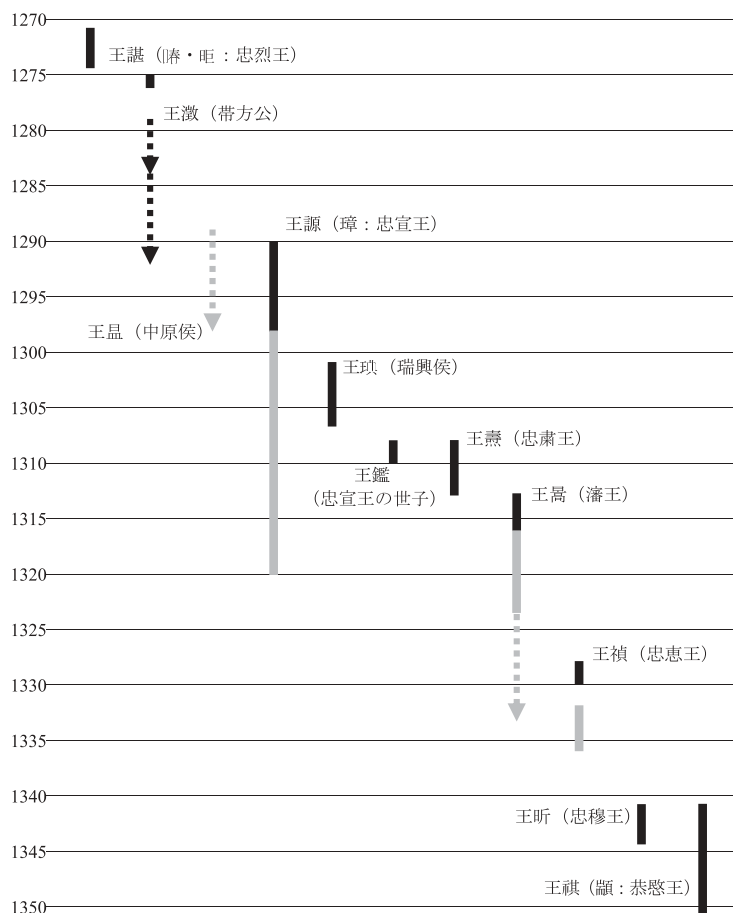
ただしこの記事は、割注に記されるように、「考蹟」、すなわち一六世紀半ば以降に成立したとみられる李松齡の『麗儒考蹟』と、順興安氏の家史・系譜記録とみられる「家乘」にもとづくものであつた。

このうち『麗儒考蹟』中の典拠記事は、重刊本『晦軒実記』卷二・諸賢撰述に

李公希俊為長湍時、檢田過一村舍、見故卷、記晦軒事頗詳。其赴元始見朱子書、潛心篤好、知為孔孟正脈、其書時未大行於燕、手録而歸、并画其真、築舍揭之、朝夕瞻謁、以致敬慕。

とひかれている。すなわち安珦による朱子学書の将来という事績は、朝鮮前期、一六世紀の人である李希俊（一五一六～七九、本貫は全州、字は景質、号は東臯・菊齋）が長湍に左遷された際（一五六〇～六三年の間の出来事⁽⁶⁾）、「村舍」で目睹した古書に記されていたという年代不明の逸話によるのである。

いっぽう「家乘」中の関係記事については、具体的な文面に関する記録がない。ただ朝鮮中期まで安珦に対する評価は、もっぱら国学復興の事績に集中しており、安珦による最初の朱子学書将来という事績が当時の後孫たちに周知されていたとはおもえない部分がある。そのいっぽうで、『晦軒実記』に引用された「家乘」の他の記事には、安珦と朱子学の関係を明らかに誇張した内容が散見される。そこで、祖先称揚を目的とする著述の一般的傾向からしても、「家乘」におけるその朱子学書将来説については、後代、おそらくは朝鮮後期に入ってから



典拠 森平雅彦「元朝ケシク制度と高麗王家——高麗・元関係における禿魯花の意義に関連して」(『史学雑誌』第110編第2号、2001年)

図 高麗王家のケシク参与

本図は年単位の概略を示すものであり、同一年内における一時的な離任・帰任は表示されない。

点線の矢印はケシクにはいったのち、任についた期間の下限を正確に把握できない期間である。このうち瀋王焄については最初に高麗に帰国する時点までを表示した。濃色部分は禿魯花としてケシクに入った期間、淡色部分は禿魯花としてではなくケシクに入っていた（またはそのようにみられる）期間。

の述作をふくむ可能性が疑われる。

また 年譜 は、編者である安在默が、上記の典拠のほか、安珣の生存時期に近い一四世紀から、自身とほぼ同時代までのさまざまな文献より安珣関係の記載をぬきだして集成したものである。そのなかには、必ずしも年代が明らかではない事績について、これを推測して編年した部分をふくんでいる。

このように、一二九〇年に繫年された安珣朱子学書将来説については、典拠史料の信憑性、とりわけその紀年の信憑性について、相当程度の疑念がもたれるのである。それゆえ、『晦軒実記』の記事に直接もつづく形で本説を自明の史実として語ることが、現時点において適当な態度ではなからう。

ただし安珣が高麗における朱子学の先駆者だったことは、『高麗史』巻一〇五・安珣伝に「晩年常に晦庵先生（「朱子」）の真を掛け、以て景慕を致し、遂に晦軒と号す」とあることから、確実である。高麗の知識人層のなかに彼に先だつて朱子学を受容し、安珣に対してこれを教授する機会を持ち得る人物がほかに確認できないことをふまえるならば、『晦軒実記』やその典拠文献が語る内容の細部にわたる信憑性はともかく、彼が元において朱子学を摂取した可能性自体は、むしろ高く評価されるべきだろう。しかし一二八九年に忠烈王にしたがつて入元した際には、一月に王都開京（現在の開城）を出立し、翌年三月に帰国した。^{〔7〕}開京と燕京間の移動には通常片道一ヶ月ほどを要するので、燕京の滞在はせいぜい二ヶ月程度と短い。かかる滞在期間にはじめて朱子学にふれたことを想定するぐらいならば、むしろ安珣にはその前に十分な機会があったとおもわれる。

一二七一年に世子として禿魯花となり入元した忠烈王が一二七四年に帰国して即位した直後、後年忠宣王となる王世子は生まれたばかりだったため、一時的な代理として傍系王族の帶方公澈が官僚子弟をひきいて新たに禿魯花となった。しかし一二七五年に彼が派遣された際には、随従する官人子弟の禿魯花の人選に問題があるとしてただちに送還されたため、一二七九年に禿魯花を編成しなおして再派遣された。その後、同公は再び帰国して

いたようで、一二八四年にも禿魯花として入元している⁽⁸⁾。

ところで、高麗が禿魯花の派遣を定例化（相通入侍）させるにあたり、元宗は一二七一年の上表文において次のように述べている。⁽⁹⁾

自臣至于輔相、欲令子弟相通入侍、而先遣世子与衣冠子弟二十人・衙内職員百人進詣

すなわち王子を禿魯花として送遣する際には、あわせて「衣冠子弟」（官人の子弟）からも禿魯花を選んで随行させることにしたのであるが、これは基本的には「輔相」（政府高官）の子弟を対象とするものであった。安珦は高官の子弟ではないが、禿魯花となった経緯があり、『高麗史』卷一〇五・安珦伝に次のように記されている。

忠烈王元年、出為尚州判官。……居三年、廉使褒其政清、遂徵為版図佐郎、俄遷殿中侍史、又選為禿魯花、

例陞国子祭酒、由右司議、拜左副承旨。

すなわち安珦は、忠烈王元年（一二七五）に尚州判官となり、三年後の忠烈王三年（一二七七）頃、版図佐郎となった。そしてその後、禿魯花に選ばれて国子司業に昇進し、さらに右司議大夫をもって左副承旨を授けられたという。左副承旨の就任は一二八八年のことなので、安珦が禿魯花となったのは一二七七～一二八八年の間ということになる。

この期間内に高麗の禿魯花が元におもむいたのは、一二七九年もしくは一二八四年の帯方公激のケースであるから、安珦もいずれかの機会に帯方公に随従する禿魯花として元におもむいたと考えられる。⁽¹¹⁾ただし一二八四年に関しては、このとき帯方公二行の禿魯花を新たに編成しなおすべき必然性がみあたらず、関係史料でもそのようには明記していないので、一二七九年の段階で編成された禿魯花が何らかの理由で一時帰国し、このときケシクの任務に復帰しただけのことである可能性もある。⁽¹²⁾ そうだとすれば、安珦は一二七九年に禿魯花となったことになろう。

その滞在期間は少なくとも数年もしくはそれ以上におよんだとみられる。この時期、高麗本国における安珦の

活動は、確實なところでは一二八八年までみとめられないので、元での滞在はこの頃までのびた可能性もある。^⑬そして禿魯花となるにあたり、安珣は上記のように高麗の国子監（国学）のナンバーツーである国子司業の職を授けられた。彼が長期間元都に滞在しつつ、華北における朱子学の中心であつた燕京の学問・教育状況、とりわけ、許衡（一二〇九〜八一、沁陽の人、字は仲平、号は魯齋）の建議によつて一二七一年に設立されて以来、朱子学教育のセンターとなつてきた元の国子学の状況について情報を得た可能性は高いといえよう。

そこで一二九〇年説が疑わしいとすれば、むしろ安珣はそれ以前に禿魯花として元に滞在した期間、すでに朱子学に接し、これを高麗に伝えていた可能性が高いと考えられる。

二 白頤正の場合

白頤正は、本貫が藍浦、字は若軒、号は彝齋である。父文節は諫官（司議大夫）をへて国学の長（大司成）をつとめた人物である。白頤正の門人である白文實（？〜一三七四、本貫は稷山、字は和夫、号は淡庵）が記した行状^⑭では、その履歴を次のように記載している。行論の便宜上、一連の記事について、〃のうちに段落を区切つて提示しよう。

淳祐七年九月日生。公天資純厚、有公輔器。

早与権文正溥・禹文僊倬、遊晦軒安先生門、講劇訓誨、自任以性理之学。

時国家伐叛問罪二十年矣。士皆衽金革操弓矢、読書者十不二。六籍之伝、不絶如縷、晦軒葺聖廟宗孔氏、於是門行諸賢、独以通経博古為事、以洗葱嶺之陋。

忠烈王甲申、権胆掌試取士、与権漢功・金元祥・崔誠之・蔡洪哲登第。

戊戌、元遣使冊世子為王。即忠宣王也。八月、徵王入朝。^(ママ)王如元、公以宿衛從之、留都下十年、多取程朱全書而歸、与同門四五人、日相講授、以経籍為淵海、箋疏為梯航、東方學者、始知有性理之学。

甲寅、累官至僉議評理・商議都監事、封上党君。癸亥十二月卒。享年七十七。……

では頤正の生年と人柄。では、頤正が「早」くに権溥（一二六二―一三四六、本貫は安東、字は育万、号は菊齋）・禹倬（一二二六―一三四一、本貫は丹陽、字は天章・卓甫、号は白雲・丹巖）らとともに安珦の門下で学問の研鑽をつみ、「性理之学」にめざめたこと。では、当時二〇年間にわたって戦争が続き学問が沈滞していたが、安珦が文廟を修復し、儒学を復興したこと。では、頤正が忠烈王一〇年甲申（一二八四）に科挙に合格したこと。では、忠烈王二四年戊戌（一二九八）に元に召喚された忠宣王に随從して頤正が一〇年間にわたって入元し、「程朱全書」を高麗にもたらし、「性理之学」を講じたこと。では、頤正が忠肅王元年甲寅（一二二四）に僉議評理・商議都監事を叙授され、上党君に封じられ、忠肅王一〇年癸亥（一二三三）に七七歳で死去したこと、を記している。

このうち　　が朱子学に関係する内容である。とくに　の事跡は、次の二つの史料に記載される内容と対応する。すなわち『高麗史』卷一〇六・白文節伝附 白頤正伝には、

時程朱之学、始行中国、未及東方。頤正在元、得而学之東還。李齊賢・朴忠佐、首先師受。

とある。白頤正は、当時高麗に「未だ」普及していなかった程子・朱子の学問を元において学び、高麗に帰国したのち、これを李齊賢・朴忠佐（一二八七―一三四九、本貫は咸陽、字は子華、号は恥庵）らに教授したという。また李齊賢の筆記雜録である『櫟翁稗説』前集二には次のようにある。

……其後、白彝齋頤正、從徳陵留都下十年、多求程朱性理之書以歸。

白頤正は「徳陵」（忠宣王）にしたがって元都に一〇年間にわたって滞在し、程子・朱子の書を蒐集して帰国

したという。

以上のように、白頤正が一二九八年から忠宣王に随従して一〇年間にわたって元に滞在し、このとき蒐集した朱子学書を一四世紀初——単純計算では一三〇七年かその直後——の高麗にもたらしたことは、複数の史料が記すところである。このことは、白頤正によって高麗に朱子学が本格的にもたらされたことを示すものとして知られている。

なかでも行状の には、白頤正によって「東方の学者」が「始めて性理の学有るを知」ったとあるが、『高麗史』本伝にも白頤正以前には「程朱之学」が「未だ東方に及ばず」とあることから、かつては白頤正こそが最初の朱子学将来者であるとする見方もあった⁽¹⁵⁾。しかし前述のように、安珦は白頤正が一二九八年に入元する以前に朱子学を将来した可能性が高く、少なくとも白頤正が元から程子・朱子の書をもたらしたのは安珦が一三〇六年に没したのちのことである。したがって上記の表現は白頤正の業績を強調・誇張したものであり、白頤正以前の段階では朱子学が『あまり広まっていなかった』という程度に解釈すべきである。白頤正の業績は、安珦の段階よりも朱子学の普及をさらに一歩促進したことにあるといえよう。

ところが行状の には、彼が「早くに安珦を通じて『性理之学』に接していたとある。これはいつのことであろうか。行状において出来事が年代順に配列されているのであれば、が記す安珦による儒学復興以前のこととなろう。ただし は年代とは無関係に配置された話題とみられる。すなわち上掲した『櫟翁稗説』前集二の記事の省略部分には、

国家伐叛耽羅、問罪東倭、丁亥之勤王、庚寅之御寇、用兵幾二十年、士皆衽金革、操弓戈挾策、而讀書者、十不能一二、而先輩老儒物故、且尽六籍之伝、不絶如綫。大德末、安文成珦為宰相、菴国学修庠序、拳李晟・秋適・崔元冲等、一經置兩教授、令禁学・内侍・五軍・三官七品已下、以至内外生員、皆從而聽習。又聞故

郎中俞咸子為僧者居泗川能讀史漢、駙召至京、而遣尹莘傑・金承印・徐諲・金元軾・朴理等、受其說。於是縫掖薦紳之徒、多以通經博古為事。

という記載がある。みられるように、行状の文章の大半は、本記事の文言（傍線部）と配列順にいたるまで一致ないし相似し、両記事の密接な関係がうかがわれる。『櫟翁稗説』前集は撰者李齊賢の自序によると、至正壬午年（同二ノ一三四二）頃に成立したのに対し、白頤正行状では、忠惠王後五年（一三四四）に元から贈られた諡にもとづく「忠肅王」の称号が用いられているので、この年以降に書かれたことがわかる。したがって行状の記載は、これにさきだって書かれた『櫟翁稗説』の記事をふまえて構成されたものと推察される。

すなわち行状のいう「當時高麗が二〇年間にわたって学問不振であり、それが安珦によつて復興された」とは、一二七三年の「伐叛耽羅」（済州島における三別抄鎮圧戦）、一二七四・八一年の「問罪東倭」（対日出兵）、一二八七年の「丁亥之勤王」（元における宗王ナヤンの叛乱に対する鎮圧戦）、一二九〇年の「庚寅之御寇」（ナヤンの叛乱を継承した宗王カダンの高麗侵攻に対する防衛戦）といった戦争の連続した一三世紀末をへて、一四世紀初に実施された、一連の国学復興事業をさすのである。内容にはやの事件より後の出来事がふくまれており、年次にそつた履歴記事とはいえない。これは、に説明された白頤正の学問背景としての安珦の事績に関する補足説明として挿入された話題というべきであらう。

白頤正行状がこのような構成をとるとすれば、そもそも年次を必ずしも明示しないについても、年代順の履歴記事に先だつ人物像の総説の一部として、に引き続き、その学問傾向の要諦を説明した記事である可能性が考えられる。そこで、の事績の年次を具体的に検討してみよう。

白頤正が安珦に師事したのが、少なくとも一二九八年以前であることは間違いない。白頤正はこの年より忠宣王にしたがい一〇年間にわたって入元し、安珦も当初これに随行するが、「久しからずして還」り、一二九九年

には高麗本国で修国史に任じられているからである。⁽¹⁸⁾ また前述のごとく、安珣は一二七九年もしくは一二八四年から禿魯花として長期入元しているので、白頤正が師事したのは、それ以前の時期か、安珣が一二八八年以前に禿魯花より帰国してから一二九八年までの間ということになる。

安珣が禿魯花となる前に師事したのであれば、当時白頤正は三三歳か三八歳より前であり、安珣が禿魯花より帰国した後に師事したのであれば、白頤正は四〇歳前後から五二歳までの間だったことになる。

彼が安珣のもとで学んだ時期に関する「早」という記載が、白頤正自身の年齢に関するものならば、相対的に前者の時期がふさわしいといえる。しかしその場合、筆者の推定どおり安珣と朱子学の出会いが一二七九年ないし一二八四年の入元を契機にしているとすれば、それ以前に彼が白頤正らに教授した「性理之学」とは狭義の朱子学を意味せず、それ以前の段階で高麗に伝わっていた朱子学以前の道学系統の学問⁽¹⁹⁾ということになる。ただしそうだとすると、安珣自身が一二四三年の生まれで、当時はせいぜい四〇歳前後か三〇代半ば以前の少壮官僚である。この頃、学者として傑出した実績が知られているわけでもなく、とくに白頤正とは四歳しか違わないので、高麗ですでに根づいた学問を学ぶために白頤正があえて師事する対象としては、不自然な感じがいなめない。

安珣の事績に関する筆者の考えには反するが、あえて、安珣が禿魯花となる前の段階ですでに朱子学を教授したと仮定するにしても、白頤正とともにその門下で学んだ禹倬や權溥の年齢が問題になる。禹倬のちに程子の『易伝』の研究で名をはせるが、出生は一二六二年である。もし一二七九年以前に安珣のもとで学んだとすれば、まだ一〇代半ば以前の少年である。のちに朱子の『四書集註』を刊行して朱子学の普及に貢献した權溥も禹倬と同年である。朱子学という最先端の学問をいち早く伝授される対象としては、その前提となる儒教の学習歴も浅く、あまりに幼いようにおもわれる。いっぽう安珣が禿魯花として入元したのが一二八四年であり、その直前に禹倬らが師事したのであれば、両名とも二〇歳前後であり、若くはあるが、決定的に不自然とまではいえない。

しかし前述のごとく、そもそも安珣が一二八四年にはじめて入元した可能性は、一二七九年にくらべて相対的に低い。

以上のような点を考慮すると、やはり一二七九年ないし一二八四年に禿魯花として入元した安珣が一二八八年までに帰国したのち、彼のもたらした朱子学を摂取すべく、一二九八年までの間に有志がそのもとにつどつたというのが真相ではなからうか。この場合、上記の「早」は、高麗における朱子学の黎明期という意味に解釈できるであらう。

ただしこの段階では、白頤正・権溥・禹倬といった中堅・若手の知識人を中心とするごく少数の動きだったたのであろう。またおそらくは、安珣のもたらした情報にも限界があり、初歩的な学習にとどまったのではないだろうか。安珣の業績としてこのことが後世なかなか注目されなかったことからすると、「知る人ぞ知る」レベルの活動だったのかもしれない。そこで、白頤正が程子・朱子の著作を体系的に——行状では「全書」とするが、当然誇張の可能性を想定すべきである——もたらしたことで、「同門四五人」からのスタートではあったが（行状）、高麗の朱子学はさらなる広まりと深まりをみせたのであろう。

白頤正が朱子学の普及に果たした役割は以上のように理解できるとおもわれるが、ここで注目したいのは、そもそも白頤正が入元することになった理由とその形態である。前述のように、それは忠宣王に随従してのことだった。一二九八年正月、忠宣王は父忠烈王から内禪をうけて即位したが、強引な政治手法や、元の承認を経ない制度改革、晋王力マラの息女である王妃ブツダシュリー公主との不和などが元にとがめられ、八月には退位を余儀なくされた。その結果忠烈王が復位するが、このとき忠宣王は再教育の名目で元のケシクに召喚されたのである。前述のごとくケシクには服属勢力の子弟を皇帝の身近においてモンゴル帝国支配層の一員として薰陶するという意義があつたが、元朝傘下の諸侯としての資質に疑問符がつけられた忠宣王に対し、そのような効果が期待され

た形になる。⁽²⁰⁾

その結果、忠宣王は一〇年間にわたって元に滞在することになるが、この間高麗では忠烈王派と忠宣王派の対立が激化し、忠烈王派は元にはたきかけて傍系王族の瑞興侯璵を次期国王に擁立することまで画策し、争いは元朝宮廷に飛び火した。当時元では皇帝の成宗テムルが病弱で、皇后ブルカンの権勢が強く、ここに阿忽台・ハ都馬辛といった高官がむすびついていた。忠烈王派は彼らに近づいたが、いっぽう丞相のハラガスンは、忠宣王を擁護する立場をとっていた。

やがて一三〇七年、成宗が子のないまま死去すると、元朝宮廷ではブルカンらによって有力宗王である安西王アーナンド（忠烈王ともしばしば接触していた）の擁立が画策されるが、ハラガスンらは機先を制して成宗の甥にあたるアウルバルワダ（のちの仁宗）をひきいれてクーデタを敢行し、ブルカン一派を排除した。かねてアウルバルワダと親しかつたともいう忠宣王はこれに同調し、その後援によって高麗本国での奪権にも成功する。元の帝位はその後アウルバルワダの兄カイシャンが継承するが、忠宣王はこの武宗政権でも厚遇され、瀋陽王の位をあたえられ（一三二〇年に瀋王に進封）、一三二〇年には死去した忠烈王をついで高麗王に返り咲く。

白頤正は、一二九八年の退位後にケシクでの勤務を名目に元に召喚された忠宣王に随従して元におもむき、王が一〇年後に復権をはたすまで、ともにあったのである。

行状によると、この間白頤正は、「宿衛を以て之（＝忠宣王の入元）に従」ったという。当時の職位は不明だが、科挙官僚である彼が武官として身辺警護の任についたとも考えにくく、ここでいう「宿衛」は高麗王のケシクであるとおもわれる。一二七四年に忠烈王が世祖クビライの息女クトウルケルミシュ公主をめとり、二一八一年に「駙馬高麗国王」の称号が誕生して以来、高麗王はモンゴル最高貴族の一員である帝室の駙馬（グレゲン süregen、女婿）としての格式を具備するにいたった。⁽²¹⁾ その結果、高麗王は、他のモンゴル諸王・駙馬と同様、

皇帝にならつてみずからのケシクを保有する特権を有した。⁽²²⁾ 忠宣王自身のケシクについては、『元高麗紀事』におさめる大徳三年（一二九九）正月の元の丞相完澤等の上奏中にも「公主与諫兩位下怯薛^{ケシクテイ}」とみえる。忠宣王（諱）が王妃ブツダシユリー公主と同様にみずからの怯薛^{ケシクテイ}（ケシクの構成員）を擁し、それがモンゴル王侯の分権的な政治勢力の単位を意味する位下（一般には投下といい、帝室血縁に関してのみ位下とよぶ）としての立場に属するものだったことがわかる。

三 李齊賢の場合

李齊賢は、本貫が慶州、字は仲思、号は益齋・櫟翁である。一四世紀の高麗を代表する文人官僚として多くの門人を輩出し、その学統は一四世紀後半に朱子学の理念をにかけて政治改革を主導した官僚層の母体となった。⁽²³⁾ 彼自身については、朱子学を学び、これを後進に伝えながら、「性理の学を楽しまず」という一面があり、それゆえ後世の儒学者たちから手厳しく批判されることになる。⁽²⁴⁾ しかし、むしろこのことは、必ずしもそれ一辺倒には染まらない、当時における多様な朱子学受容のありかたを示すものとして、注目する必要があるだろう。

前掲の『高麗史』白頤正伝によると、高麗にもどつた白頤正は、その学問を李齊賢・朴忠佐に伝授したといふ。すなわち李齊賢は、すでに高麗本国で朱子学を学んでいたのだが、その後、彼が学問を大きく発展させた契機について、李穡『牧隱集』文叢卷一六・鷄林府院君諡文忠李公（＝李齊賢）墓誌銘では次のように記している。

忠宣王、佐仁宗定内難、迎立武宗、故於兩朝寵遇無對、遂請伝国于忠肅、以大尉留京師邸、構万卷堂、考究以自娛、因曰、京師文学之士、皆天下之選、吾府中未有其人、是吾羞也。召至都、実延祐甲寅正月也。姚牧菴・閻子静・元復初・趙子昂、咸游王門、公周旋其間、学益進、諸公称嘆不置。

いつばう『高麗史』卷一一〇・李齊賢伝にも、

忠宣佐仁宗定内乱、迎立武宗、寵遇無対、遂請伝国于忠肅、以大尉留燕邸、構万卷堂、書史自娛、因曰、京師文学之士、皆天下之选。吾府中未有其人、是吾羞也。召齊賢至都。時姚燧・閻復・元明善・趙孟頫等、咸游王門、齊賢相從、学益進、燧等称嘆不置。

とあるように、よく似た内容と言言からなる記事がみられるが、これは朝鮮時代の『高麗史』撰者が上記の墓誌銘の記事にもとづいて再構成した文章と考えられる。

すなわち忠宣王は、一三〇八年に復位したのち、武宗期を通じて、そして仁宗期に入ってから元朝廷にとどまり、一三一三年に息子の忠肅王に譲位してからも引き続き滞在していた。退位後、忠宣王は燕京に「万卷堂」を築造して学問・文化活動にいそしむ生活をおくり、その際、延祐甲寅年（延祐元／一三二四）正月に李齊賢を元によびよせた。忠宣王のもとには、姚燧（一二三八～一三二三、柳城の人、字は端甫、号は牧庵）、閻復（一二三六～一三二二、高唐の人、字は子静、号は静軒・静斋・静山）、元明善（一二六九～一三二三、清河の人、字は復初）、趙孟頫（一二五四～一三二三、湖州の人、字は子昂、号は松雪斋）など、当代中国の名だたる漢人文士が出入りしており、李齊賢は彼らについて学問を深め、その賞賛をうけたという²⁵。

『益齋乱藁』卷九上・有元贈敦信明義保節貞亮濟美翊順功臣太師開府儀同三司尚書右丞相上柱国忠憲王世家には、忠宣王と交流のあつた漢人文士として、他にも蕭剡（一二四一～一三一八、咸寧の人、字は惟斗、号は勤斋）、張養浩（一二六九～一三二九、濟南歷城の人、字は希孟、号は雲莊）、洪革（未詳）といった人物をあげている。さらに『高麗史』卷三四・忠宣王世家・忠肅王元年では虞集（一二七二～一三四八、撫州崇仁の人、字は伯生、号は邵庵）、また李齊賢の「太祖賛」（『益齋乱藁』卷九上・史贊／『高麗史』卷二・太祖世家）では王構（一二四五～一二三〇、東平の人、字は肯堂、号は安野）の名もあげている。

このうち姚燧・閻復・王構については、その没年からみて一三一四年に入元した李齊賢と交流があった事実は否定され、洪革についても李齊賢が燕京におもむく前に病のため帰郷した可能性が指摘されている⁽²⁶⁾。が、いずれにせよ李齊賢は、こうした中国の人士たちとの直接的な交遊を通じて現地の朱子学に接し、みずからの学問を深化させたとみられる⁽²⁸⁾。元の仁宗は、兄武宗の治世に「皇太子」だった時分より、こうした漢人文士を召し抱え、一種の文化サロンを形成していた。当時皇太子の師傳役、太子太師の職にあつた忠宣王はそこに深く関わり、姚燧・蕭剡・閻復・洪革・趙孟頫・元明善・張養浩ら当代の名士を「推轂」して「宮官に備えた」という⁽³⁰⁾。ここには誇張があるかもしれないが、姚燧に関しては彼の文集『牧庵集』附録の年譜にもそのことが記されている。そのほか江蘇地方の鎮江に関する元代地方志『至順鎮江志』巻一九・人材・仕進・僑寓にも、「瀋陽王（忠宣王）によつて至大年間（武宗朝）に皇太子（仁宗）の東宮説書・必闇赤^{ビチゲチ}（書記）・宮師府太子文学に推薦された王珪」という人物が紹介されている。このような元朝宮廷における忠宣王の位置にも関係して、同王の周囲には漢人文士たちの交流ネットワークが広がったのであり、李齊賢はその余慶にあづかつた形になる。もちろん元に長期間滞在することで、さらに多様な交流も広がったであろう⁽³¹⁾。

さて復位後および退位後の忠宣王の元朝滞在は、いかなる形式のもとでおこなわれたであろうか。これについて筆者は、ケシクに勤務するという形をとったことを、すでに指摘したことがある⁽³²⁾。すなわち『高麗史』巻三三・忠宣王世家・忠烈王三四年（一一三〇八）——月辛未には、

王（「忠宣王」）下教曰、……孤亦入侍、繼為駙馬、歷^レ三朝（「世祖・成宗・武宗」、于今十有九年。

とある。忠宣王が復位するにあたって発した教の一節だが、みずからの過去をふりかえり、自身がかつて元朝宮廷に「入侍」して駙馬となり、世祖より三代の皇帝に「歴衛」したと述べている。また至順元年（一一三三〇）に崔瀼によつて書かれた「元善之墓誌銘」⁽³³⁾には

是時(＝一三二三年) 徳陵(＝忠宣王) 入侍聖朝久、殊無東歸意。

とあり、一三二三年の段階で忠宣王が元朝宮廷に長らく「入侍」していたという。さらに『高麗史』巻一〇七・閔漬伝には

「忠宣王」留侍、歴事五朝(＝世祖・成宗・武宗・仁宗・英宗)。

とあり、忠宣王が世祖より五代の皇帝に対して「留侍」したと述べる。漢文史料では、一般にケシクに勤務することを「入侍」「宿衛」と表現することが多く、高麗王族が勤務する場合も同様だった。⁽³⁴⁾ 忠宣王は、潜邸時代の一二九〇年から一二九八年まで、禿魯花として世祖・成宗のケシクに入っていた。⁽³⁵⁾ そして前述のごとく、一二九八年に即位するものの、年内に退位し、再びケシクに召喚され、さらに一〇年間をすごした。世祖・成宗に対する「入侍」「歴衛」はまぎれもなくケシクでの勤務を意味するので、これと同列に叙述される武宗から英宗シディバラまでに対するそれも、やはりケシクに入ったことを意味する可能性が高い。

その具体的な傍証となるのが次の『秘書監志』巻二・禄秩の記事である。

皇慶元年(＝一三二二年) 十一月、集賢大学士中奉大夫秘書監卿提調回司天台事苦思丁、秘書少監盛朝列等官、於今月十七日有提調陰陽官曲出太保也里牙於当職等处伝奉聖旨節該。也可怯薛第一日、嘉禧殿内有時分、对亦只里不花王、速古児亦月魯帖木児知院、明理統哈、昔寶赤塔海、忽都魯、亢沙児等有来。提調陰陽官曲出、太保也里牙、忙古歹交奏。……奏呵、奉聖旨。……麼道、聖旨了也。欽此。

傍線を附した文言は元の奏議記録にしばしばみられる書式であり、四番のケシクのうち上奏が行われた際に番直していたケシクとその番直日、場所、近侍していたケシクたち、上奏者といった項目が列記される。ここでの場合、ケシク四番のうち皇帝に直属するイエケ＝ケシク(也可怯薛)の当直初日、嘉禧殿において、提調陰陽官曲出・太保也里牙・忙古歹らの上奏がおこなわれたということになるが、その現場にたちあつた近侍者の筆頭に、

亦只里不花王の名があがつている（ゴチック体で表示した部分）。これはイジルブカというモンゴル名をもつ忠宣王⁽³⁶⁾のことにほかならない。すなわちこの史料は、一三一二年の段階で、同王がときの仁宗皇帝のもとにケシクとして近侍していたことを示しているのである。

すなわち復位後の忠宣王は、ケシクとして皇帝の側近に仕えるという形をとって元朝宮廷に滞在し続け、退位後にもこれを継続したとみられる。李斉賢はその従臣として燕京に召喚されたことで、著名な漢人文士たちと交遊する機会を得たのである。

その後、李斉賢は一三一九年に忠宣王にしたがって江南を旅したのち高麗に帰国した模様で、一三二〇年の科挙で知貢挙を勤め、一三三二年に再び入元する⁽³⁷⁾。しかしこのときすでに忠宣王は英宗によって「吐蕃」に流配されていた（詳細後述）。したがって、李斉賢が忠宣王の従臣として元に滞在したのは、一三二四年から一三一九年頃までということになる。

四 崔文度の場合

崔文度は、本貫が全州、字は義民、号は春軒である⁽³⁸⁾。父誠之は忠宣王のブレインとして知られ、元の授時暦を学んでその原理を高麗に伝えた人物でもある。

至正五年（一三四五）に李斉賢によって書かれた「崔文度墓誌銘」⁽³⁹⁾には次のような記載がみられる。

春軒宿衛中朝、習蒙古字語、綺襦紉袴之与処、韋韜毳帽之与游、是宜富驕、於格物致知・脩己理人之道、莫得其門而入焉。顧能出則手弓劍、入則目簡編、濂溪二程晦菴之書、皆彙而觀之。夜分而寢、雞鳴而起、必將詳節目、極蘊奧心、得躬行、然後乃已。……忠肅王入朝、藩府用事者、煽起鬬牆之禍、讒口交騰、拳無全人。

春軒身從其居、而志其義、直而能敬、彼此無憾。

すなわち文度は、元に「宿衛」し、モンゴル語（蒙古字語）を学び、元の「綺襦紈袴」（貴戚の子弟）や「韞毳帽」（モンゴル人）と交わったが、儒学（格物致知・脩己理人之道）においては特定の人物に師事せず、書物を通じてこれを学び、周濂溪・二程・晦庵朱子の書（濂溪二程晦菴之書）を集めて読み、日々の生活のなかで省察を進めたという。

ここで崔文度は元の「宿衛」に参加しているが、前述のごとく「宿衛」とはケシクにほかならない。このことについて『高麗史』巻二〇八・崔誠之伝附 崔文度伝は、

以世家子宿衛元朝、樂觀濂洛性理之書。

と記している。すなわち彼は「世家の子」として「宿衛」（ケシク）にたずさわるなかで、性理学の書に親しんだという。「世家」とは一義的には代々官僚を出す家柄のことである。崔文度はそのような家柄の子弟なので、ケシクに入ったということになる。

前述のように、高麗から王子・王族を禿魯花としてケシクにいれる場合、官人の子弟（衣冠子弟）からも禿魯花を徴集したが、基本的には高官（輔相）の子弟を提出した。判明する具体例の多くも、このことを支持する。⁽⁴¹⁾

瑞興侯瑬が禿魯花として派遣された際に随従した崔雲について、崔濯『拙藁千百』巻一・皇元高麗故通憲大夫知密直司事右常侍上護軍崔公墓誌銘には、

大德癸卯（＝大徳七年（一三〇三））、⁽⁴²⁾ 以世家子、随王瑬宿衛闕庭、号都魯花。

とある。彼が「世家の子」であることにより禿魯花としてケシクに入ったというのも、要するに高官の子弟として禿魯花に選ばれたことを意味するのである。⁽⁴²⁾ 崔文度については「宿衛」（ケシク）に入ったと記されるだけだが、「世家の子」としてそのような措置がとられたのであるから、崔雲と同様に高官の子弟として禿魯花に選

ばれる形でケシクに入ったことを意味するとみてよいとおもう。

問題はどの王子・王族に随従して禿魯花となったかである。まず時期の下限について検討すると、「崔文度墓誌銘」の上掲記事の後半には、文度の入元後におこった事件として、忠肅王と瀋王暲の対立が記載されていることが手がかりになる。

前述のように、忠宣王は一三〇七年に武宗推戴の功績により瀋陽王の位を授かり（のちに瀋王に進封）、一三〇八年以降は高麗王位と兼帯した。一三二一年に高麗王位を子の忠肅王にゆずると、我が子のごとく愛育していた甥の暲（異母兄江陽公滋の子）を高麗世子に冊立したが、一三一六年にいたって暲に瀋王位をゆずった。忠宣王は高麗王位を退いたのちも元朝宮廷にとどまり、高麗本国の統治に関しても実権をにぎっていたが、一三二〇年に庇護者であった仁宗が死去すると、父の代の執権層の刷新をまくるむ新帝英宗シデイバラによって「吐蕃」（チベット）に流配されてしまう。かねて父王の権力掌握に不満をいだいていた忠肅王は、この機をとらえて父王勢力の排除にのりだが、元朝宮廷にあった瀋王暲が高麗王位の獲得をねらって忠肅王に関する讒言をくりかえした結果、一三二一年、忠肅王は元朝宮廷に召喚され、王印剥奪のうえ抑留されたのである。「崔文度墓誌銘」にいう忠肅王と瀋王暲の対立事件は、このときの状況について述べたものである。

したがって、文度がケシクに入っただのは一三二一年以前であることがわかる。そこで彼が生まれた一二九二年から一三二一年までの間に高麗から派遣された高麗王家の禿魯花をあげると、瑞興侯瑱（一二〇一）、王子鑑・燾（一二〇八）、世子暲（一二二二）となる。⁽⁴³⁾

このうち瑞興侯への随従の可能性はまっさきに否定される。前述のごとく、一二九八年の強制退位後、忠宣王は父忠烈王とするとく対立しており、瑞興侯の派遣は、彼を忠宣王にかわる王位継承者に位置つけようという忠烈王側の画策であった。いっばう文度の父誠之は、このとき忠宣王の従臣として王と行動をともにしていたので、⁽⁴⁴⁾

その息子が對抗馬の随従者に選ばれることはあり得ないと考えられる。また崔文度の家門は、代々官僚を輩出してきたという点では「世家」とよぶにふさわしいが、前述のごとく禿魯花には実際にはその時点における高官の子弟から選抜するのが通例だったとみられるので、この時点でさしたる職を得ていなかった誠之の子は基準外ということになる。

のちに忠肅王となる王子熹も文度の随従対象としてはふさわしくない。熹は一三二三年に即位して帰国している。崔文度がその従臣だったならば、ともに帰国する可能性が高いと考えられるが、墓誌銘が語るように、彼は一三二二年頃にもなお元に滞在を続けており、この間に帰国した形跡はみられない。

忠肅王の兄である鑑については、一三二〇年の段階でその従臣金重喜らとともに忠宣王から賜死されている⁽⁴⁵⁾。文度がその従臣だった場合、かりに死を免れたとしても、禿魯花となった王族に随従してケシクの任にあたってきたそれまでの立場から離れて、独自にケシクでの勤務を続けられたか、疑問がのこる。

いっぽう一三二三年に入元した世子暲は、一三二六年に藩王位についてからも元にとどまり、ケシクにおいて皇帝に近侍していた⁽⁴⁶⁾。彼と忠肅王が対立した際⁽⁴⁶⁾の状況について、「崔文度墓誌銘」では、「藩王府に仕える者が内紛の禍を巻き起こし、讒言がはげしくとびかい、聖人君子はまったくいかなかった。春軒は、体はその居所に従いながら、義を志し、公正でよくつつしみ、彼我ともにくらみをかうことがなかった」と記している。崔文度が藩王暲の従臣だったことは明らかである⁽⁴⁷⁾。

文度の父誠之は、一三二二年の段階で同知密直司事・大司憲⁽⁴⁸⁾、一三二三年二月の段階で密直司使に就任している⁽⁴⁸⁾。この間に別官庁への異動があった可能性も排除はできないが、世子暲が禿魯花として派遣された当時すでに、王命出納・機密顧問にあたる密直司の宰相に就任するだけの高官だったことは確かである。その子が禿魯花に選ばれるのに何ら遜色はない。

以上のように、崔文度は世子暲に随従する禿魯花として元のケシクに入り、暲の從臣として元にとどまっていたと考えられる。そうしたなかで彼は朱子学の研鑽につとめたわけだが、「出づれば則ち弓劍を手にし、入れば則ち簡編を目し、濂溪二程晦菴の書、皆な彙めて之を觀ず」というように、武器を帯びてケシクの当直にあたりつつ、非番時には學問にふけるという生活を送っていたのである。

おわりに

以上みてきたように、安珣・白頤正・李齊賢・崔文度という初期の代表的な朱子学受容者については、彼らが朱子学という學問に触れ、あるいはこれを深める過程において、禿魯花・ケシク制度との関わりという共通の背景が看取された。

もとより禿魯花やケシクそのものが朱子学學習の場になったわけではない。また忠宣王が長らく元にとどまっていたのも、ケシクでの活動そのものが一義的な目的だったというより、元において政治活動をおこなうための方便だったというべきである。しかしその際、単なる寄寓ではなく、ケシクに勤務するという形がとられたことは、両国の通交形態を規定する制度上の枠組みとしての意味がみとめられるであろう。この点において、高麗・元両国の關係をとりむすぶ政治的慣例としての禿魯花・ケシク制度は、高麗人が中国大陆で朱子学に接する機会を間接的にお膳立てした舞台背景として評価し得るのである。

くわしくは次稿で論じることにしたいが、一四世紀前半において、高麗人が朱子学にふれる機会は一時的にも量的にも拡大してゆく。たとえば、中国大陆から典籍の移入が政府レベル・民間レベルで拡大し、高麗国内でも元刊本の複製をふくめて朱子学書の独自の刊行が行われるようになる。また一三一三年に元で科挙が復興し、高麗

からも応募者を送ることが慣例となるが、この科挙では朱子学が經典解釈の準拠に指定されたため、受験者の朱子学学習は必然となった。そして及第者は元で任官するとともに、当地の知識人と交遊を深め、またその子弟には元の国学に留学する権利が与えられた。また高麗本国にも征東行省の儒学提挙官（儒学行政担当官）⁽⁴⁹⁾などの形で漢人文士が直接来訪する機会があった。

しかし、このような太く、あるいは多面的なパイプが形成される前の段階においては、高麗人が中国大陆に長期間にわたって滞在し、その文物に直接ふれる機会を提供するものとして、禿魯花・ケシク制度の意義は相対的に大きかったといえるのではないだろうか。

もちろん朱子学に関する情報は、たとえば使臣として短期間滞在するだけでも、ある程度は摂取可能であろう。一三世紀後半に通訊官として活躍した趙仁規の墓誌銘に「其れ四書・伝記に於いては稍や留意する有り」とある。⁽⁵⁰⁾ 彼が朱子学の基本經典である四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）にある程度の関心を有したということは、もしかすると、彼が元への使行を通じて何らかの学習体験を有したことを示唆するのかもしれない。

また当然ながら、初期段階であっても、高麗国内で人から人へとつづがれた学脈を無視することはできない。そのことは、本稿でもふれたように、白頤正や李齊賢が入元する前に本国である程度の朱子学学習を経験していたこと。また朱子学に関連した入元事績がとくに伝わらない権溥・禹倬・朴忠佐らの存在からも明らかである。しかし安珣・白頤正・李齊賢という、朱子学の東伝において初期の重要画期をなす人物の事績が、いずれも禿魯花・ケシク制度との関わりを背景として展開している事実は、その国際的契機としての重要性を十二分に物語っているとおもわれる。

近年の研究では、初期の朱子学学習者の一例として、朱子の『資治通鑑綱目』にならって『本国編年綱目』を編纂しながら、朱子の一部の教説に疑義を表明した閔漬（一二四八―一三三六、本貫は驪興、字は龍涎、号は黙

軒⁽⁵¹⁾の存在も注目されている。その朱子学学習の契機として明証があるわけではないが、彼についてもまた、一二九〇年に当時世子であった忠宣王が禿魯花としてケシクに入った際、これに随従して入元した経験があるため、安珦らと同様な背景を想定できるかもしれないのである。

註

- (1) 本節で述べる高麗後期の朱子学受容に関する研究動向とその問題点については、参考文献をふくめて、拙稿「朱子学の高麗伝来と対元関係（その一）」——安珦朱子学書将来説の再検討」（『史淵』第一四三輯、二〇〇六年）六五―六七頁、参照。
- (2) 禿魯花・ケシク制度と高麗王家の関わりについては、拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家——高麗・元関係における禿魯花の意義に關連して」（『史学雑誌』第一一〇編第二号、二〇〇一年）参照。
- (3) 拙稿「朱子学の高麗伝来と対元関係（その二）」（註1前掲）参照。なお上記拙稿の発表後に目撃した関係論考として、이상두 「性리학의 統治理念化過程에 관한 考察——晦軒安珦의 性理学受容을 中心으로」(『동북아연구』제七권、二〇〇二年)、윤원현 「회현 안향의 행정과 사상에 대한 비판적 검토」(『동서철학연구』제三五호、二〇〇五年)、장동의 「安珦의 生涯와 行蹟」(『退溪學과 韓國文化』第四四号、二〇〇九年)、정성식 「晦軒 安珦의 朱子學 수용과 성격」(『東方學』第一七輯、二〇〇九年)も参照。
- (4) 『晦軒実記』については、拙稿「『晦軒実記』刊行始末初探」(『年報朝鮮學』第九号、二〇〇六年)参照。筆者は現在までに一〇種の版本を確認した。
- (5) 『高麗史』卷三〇・忠烈王世家・一五年(一二八九) 二月壬子および一六年三月丁卯。
- (6) 申欽「象村集」卷二六・贈大匡輔国崇祿大夫議政府領議政兼領經筵弘文館芸文館春秋館觀象監事世子師行資憲大夫兵曹判書兼知經筵事李公神道碑銘。
- (7) 註5所掲史料参照。
- (8) 帶方公澈の禿魯花派遣の経緯については、拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」（註2前掲）六八―六九・七六頁、参照。
- (9) 『高麗史』卷二七・元宗世家・二二年(一二七二) 六月己亥。

- (10) 『高麗史』 卷三〇・忠烈王世家・一四年(二二八八) 正月己丑。
- (11) 筆者は前稿「朱子学の高麗伝来と対元関係(その一)」(註1前掲)において、安珦が二二八四年に入元した可能性については言及しなかったため、ここで訂正・補足する。
- (12) 新規に禿魯花を派遣する場合、通常『高麗史』等では当該の禿魯花を「遣わす」と表現する。しかし二二八四年の帯方公の入元の場合、『高麗史』 卷二九・忠烈王世家・一〇年(二二八四) 四月甲辰に「帯方公激らが禿魯花として元におもむいた」(帯方公激等、以禿魯花如元)とあり、入元する複数の当事者を主語として記す。同様な例は『高麗史』 卷三〇・忠烈王世家・一五年(二二八九) 二月庚寅にも「弓箭陪(ケシク)の中原侯益が元におもむいた」(弓箭陪中原侯益如元)とある。この場合、中原侯は父である帯方公激が取得したケシクの資格を世襲することで、高麗政府による派遣とは別に、独自の立場でケシクに入ったとみられる(拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲) 六九・七六頁)。そのため彼を主語として入元の事実が記されたのであろう。二二八四年の帯方公の例も同様にみてよければ、帯方公一行が二二七九年の段階ですでに取得した、ケシクであるところの禿魯花としての資格にもとづき、独自に行動していると読み取ることが可能であらう。ケシクは許可を得て、または皇帝の用命により一時的に任を離れることが可能であり、高麗王族についても帯方公以外に実例がある(拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲) 八六頁、註47、参照)。
- (13) 安珦は二二八八年に高麗宮廷で王の主催する宴席に侍っている(『高麗史』 卷三〇・忠烈王世家・一四年(二二八八) 四月戊寅)。
- (14) 白文寶『淡庵先生逸集』 卷二・文憲公彝斎先生行狀 なおこの白文寶の文集は、朝鮮時代にその遺文を集めて一九世紀末以降に刊行されたものである(『高麗名賢集5』(成均館大学校出版部、一九八七年) 一九―二四頁、参照)。とくに文憲公彝斎先生行狀については、文集編纂時にはすでに末尾が欠けた逸文が残る状態だったらしい。
- (15) 尹瑑均「朱子学の伝来とその影響に就いて」(『尹文学士遺稿』 申奭鎬・末松保和、一九三三年) 二五―三一頁。
- (16) 『高麗史』 卷三五・忠烈王世家・忠惠王後五年。
- (17) 『高麗史』 卷一〇五・安珦伝。
- (18) 『高麗史』 卷三一・忠烈王世家・二五年(二二九九) 九月己亥。
- (19) 高麗における朱子学受容の史的前提については、拙稿「朱子学の高麗伝来と対元関係(その一)」(註1前掲) 九八頁、註1所掲の諸論考を参照。

- (20) 忠宣王退位後のケシク召喚とその経緯については、拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」（註2前掲）六九～七〇・七七～七八頁、参照。
- (21) 駙馬高麗国王号の成立過程とその意義については、拙稿「駙馬高麗国王の成立——元朝における高麗王の地位に関する予備的考察」（『東洋学報』第七九巻第四号、一九九八年）参照。
- (22) 高麗王のケシクについては、拙稿「高麗王位下の基礎的考察——大元ウルスの二分権勢力としての高麗王家」（『朝鮮史研究会論文集』第三六集、一九九八年）五九～六一頁、参照。
- (23) 이익주 「14세기 전반기 성리학 수용과 이세현의 정치활동」 （『典農史論』第七輯、二〇〇一年）参照。
- (24) 『高麗史』卷一〇・李齊賢伝。
- (25) 元における李齊賢の活動、とくに漢人文士との交遊については、以下の論考を参照。金庠基 「李益齋의 在元生涯에 대하여——忠宣王의 侍從의 臣으로서」（『大東文化研究』第一輯、一九六三年）、鄭玉子 「麗末 朱子性理學의 導入에 대한 試考——李齊賢을 中心으로」（『震檀學報』第五一輯、一九八一年）、周采赫 「元 萬卷堂의 設置와 高麗 儒者」（『孫寶基博士停年紀念論叢刊行委員會編』孫寶基博士停年紀念韓國史學論叢 知識産業社、一九八八年）、朴現圭 「李齊賢과 元文士들과의 交遊致——益齋亂黨 와 元代 文集을 위주로」（『嶺南漢文學』第三輯、一九九一年）、朱端平 「益齋 李齊賢의 中國에서의 行跡과 元代人士들과의 交遊에 대한 研究」（『南冥學研究』第六輯、一九九七年）、金文京 「李齊賢在元事跡考（其の一）——第一次入元から峨眉山奉使行まで」（『朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究』平成二一～二四年度科学研究費補助金（基盤研究A）（一）研究結果報告書、代表・吉田宏志、二〇〇三年）、朴現圭 「고려말 성리학과 李齊賢의 수용 과정」（『漢文學報』第二三輯、二〇〇五年）、金文京 「高麗の文人官僚・李齊賢の元朝における活動——その峨眉山行を中心に」（『夫馬進編』『中國東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇七年）。
- (26) 朴現圭 「李齊賢과 元文士들과의 交遊致」（註25前掲）一三四～一三五頁、金文京 「李齊賢在元事跡考（其の二）」（註25前掲）二四七～二四八頁、同 「高麗の文人官僚・李齊賢の元朝における活動」（註25前掲）二二七～二二八頁。
- (27) 朴現圭 「李齊賢과 元文士들과의 交遊致」（註25前掲）一三五頁。
- (28) 鄭玉子 「麗末 朱子性理學의 導入에 대한 試考」（註25前掲）、朴現圭 「고려말 성리학과 李齊賢의 수용 과정」（註25前掲）三〇～三三頁、参照。
- (29) 仁宗は、成宗没後の元朝宮廷でクーデタに成功したものの、モンゴリアに出鎮していた兄武宗が大軍をバックに南下してきた

ため、これに帝位を譲り、実弟でありながら「皇太子」として位置づけられた。

(30) 『益齋乱黨』 卷九上・有元贈敦信明義保節貞亮濟美翊順功臣太師開府儀同三司尚書右丞相上柱国忠憲王世家。

(31) 朴現圭は、湯炳龍(二二四)？、丹陽の人、字は子文、号は北村)、許謙(二二七〇)一三三七、金華の人、字は益之、号は白雲)、陳樵(二二七八)一三六五、東陽の人、字は君采、号は鹿皮子)など、当時江南に居住していた人士との交流について指摘している(朴現圭「李齊賢과 元文士들과의 交遊」(註25前掲)三三丁三九頁)。

(32) 拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲)七〇、七一頁。

(33) 韓国・国立中央博物館所蔵。筆者は韓国・国立文化財研究所の韓国金石文総合映像情報システム(<http://gsn.nrip.go.kr/third/user/main.jsp>)により拓本の写真を閲覧。なお釈文にあたっては崔濯「拙藁千百」卷一・有元故武德將軍西京等処水手軍万戸兼提調征東行中書省都鎮撫司事高麗宰相元公墓誌、劉燕庭撰、劉承幹補「海東金石苑」補遺卷六・元善之墓誌、李蘭映編「韓国金石文追補」(中央大学校出版部、一九六八年)九六八、九七三頁、許興植編「韓国金石全文」中世下(亜細亜文化社、一九八四年)一一四〇、一一四三頁、金龍善編「高麗墓誌銘集成(第四版)」(翰林大学校出版部、二〇〇六年)四六九、四七一頁も参照。

(34) 拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲)六三丁六五頁、参照。

(35) 拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲)六九、七〇頁、参照。

(36) 『高麗史』卷三三・忠宣王世家・即位記。

(37) 『牧隱集』文彙卷一六・鵝林府院君諡文忠李公墓誌銘。

(38) 崔文度の朱子学受容に関する専論として、고혜령「원 간섭기 성리학 수용의 일 단면——崔文度を 중심으로」(『한국중세사연구』제八호、二〇〇五年)参照。

(39) 韓国・国立中央博物館所蔵。筆者実見。なお釈文にあたっては李齊賢「有元高麗国匡靖大夫都僉議參理上護軍春軒先生崔良敬公墓誌銘」(『益齋乱黨』卷七ノ「東文選」卷二二四)、李蘭映編「韓国金石文追補」(註33前掲)二二九、二三〇頁、許興植編「韓国金石全文」中世下(註33前掲)一一六一、一一六四頁、金龍善編「高麗墓誌銘集成(第四版)」(註33前掲)五二七、五二八頁も参照。

(40) この基準にそぐわないと判定された場合には、禿魯花がさしもどされることもあった(拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲)六八頁、参照)。ただし前述した安珦が毘史を父にもつ官僚だったように、必ずしもすべてがそうだったわけではない。

- (41) ただし瑞興侯が禿魯花になったのは二二〇一年のことである。この年次のずれについては、拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲) 七一頁、参照。
- (42) 崔雲の祖父昱は元宗朝に中書侍郎平章政事(正二品)にいたり、詳細な履歴は不明ながら、その父文立も三司使(正三品)にいたった人物である(『高麗史』 卷九・崔惟清伝附 崔昱伝)。文立については『拙藁千百』 卷一・皇元高麗故通憲大夫知密直司事右常侍上護軍崔公墓誌銘に、その文散階が奉翊大夫(從二品下)とも記される。
- (43) 拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲) 第二章、参照。
- (44) 『高麗史』 卷一〇八・崔誠之伝、李齊賢「推誠亮節功臣重匡光陽君崔公墓誌銘并序」(『益齋亂藁』 卷七ノ「東文選」 卷一二四)。
- (45) 『高麗史』 卷三三・忠宣王世家・二年五月乙巳。
- (46) 拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲) 七二頁。
- (47) 『高麗史』 卷三四・忠肅王世家・忠宣王四年六月壬辰。
- (48) 『高麗史』 卷三四・忠肅王世家・忠宣王五年二月己卯。
- (49) 二二八七年以降、高麗の地に常設された元の最高地方統治機関。ただしその長官は歴代高麗国王が兼任し、その高度な自律性のもとで運営された。官員の任命には、王の保拳(推薦)を元朝政府が承認する形をとる。
- (50) 『平壤趙氏世譜』(平壤趙氏大同譜所、一九二九年) 貞肅公諱仁規墓誌文。
- (51) 閔漬の朱子学受容に関する専論として、이익주「14세기 유학자의 현실인식과 성리학 수용과정의 연구——민지의 사례를 중심으로」(『역사와 현실』 제四九호、二〇〇三年) 参照。
- (52) 『高麗史』 卷三〇・忠烈王世家・一六年(二二九〇) 二月丁卯に「遣世子如元。政堂文学鄭可臣・礼賓尹閔漬等從行」とある。このときの世子(忠宣王)の入元がケシクへの入侍であり、禿魯花としての派遣を意味することについては、拙稿「元朝ケシク制度と高麗王家」(註2前掲) 六九・七五頁、参照。